



子どもの耳、ちゃんと聞こえていますか？

3月3日は「耳」の日。

ふだんは意識しないことが多いでしょうが、耳の健康は、子どもの発達において、とても重要な役割を果たします。この機会に、子どもの難聴について保育者が知っておくべきことなどを、確認しておきましょう。

●指導／笠井創（笠井耳鼻咽喉科クリニック院長）

子どもの「耳の聞こえ」の発達

人間の聴覚は、母親のおなかの中にいるころから、十分に発達しています。耳が聞こえない、または聞こえが悪いと、当然のことながら、生活にさまざまな不便をきたします。特に0〜4歳くらいまでの乳幼児の場合は、ことばを覚える重要な時期にあたり、ここで両耳が難聴の状態になると、ことばの習得がうまくいかなくなってしまいます。また、この時期を逃してしまうと、あとからことばを話せるようにするためには、たいへんな困難が伴うものです。このため、中程度以上の両耳の難聴は、遅くとも1歳代までに発見することが理想とされています。

子どもの聴覚を調べる機会としては、1歳半健診や3歳児健診がありますが、専門家の間でも小児難聴は数が少ないという先入観があるため、見過ごされてしまうことも多いようです。ですから、保護者はもちろんのこと、毎日子どもを見ている保育者も、それぞれの子どものことばの発達や音に対する反応を注意深く観察することが重要です。



一方、片側だけの耳の難聴の場合は、日常生活やことばの習得には大きな支障はなく、中高生になっても発見されなかったりするほどです。ですから、もし片側の耳に難聴が見つかったとしても、神経質になりすぎる必要はありません。周囲の大人が必要以上に気をつけ、プレッシャーを与えてしまうことで、かえって子どもの心に影響を与えることになりかねないからです。

（音）が聞こえるメカニズム

耳介で集められた音は、外耳道を通じて鼓膜を振動させます。振動は、中耳の耳小骨（つち骨、あぶみ骨、きぬた骨と呼ばれる）によって17倍に増幅され、内耳の蝸牛という部分に伝えられます。この蝸牛の内部で、振動が電気信号に変換され、聴神経を通じて脳に伝えられます。

このうち、外耳道から中耳までの経路に障がいがあると聞こえが悪くなるものを「伝音難聴」、内耳から脳までの経路の障がいを「感音難聴」といいます。

耳の構造

